

交流

〈大会発表要旨〉

◆富嘉吟 江戸末期における漢籍の流
転『竹友集』を例として 宋の謝邁の文集である『竹友集』(または『謝幼榮文集』)は、その宋刊本は大陸に早く散逸してしまっただが、幕末まで日本に伝存してきた。後に楊守敬を経て大陸に戻り、現在、上海博物館が所蔵しているが、その伝来については不明なところが多く残っている。本発表では、狩谷掖斎の『求古楼展観書目』、松崎慊堂の『慊堂日曆』、浅野梅堂の『寒檠瓊綴』などの資料を用い、宋刊本『竹友集』は掖斎の旧蔵であり、新見正路・浅野梅堂・向山黄村の架蔵を経て中国に戻った経緯を明らかにし、また、上海図書館所蔵の影鈔本『竹友集』は新見正路が作ったものとの仮説を提出した。

何らの原因で遂行しなかったようである。傅增湘は李盛鐸のところまで青色「反文」の「新法影本」『竹友集』を見たことがあるが、それが楊守敬が作った版下ではないかと憶測している。

◆伊藤さとみ 中国語の語氣副詞「可」
伊藤(二〇二二)の調査に基づき、その表す語氣について、統一的な意味論を提案した。副詞「可」の表す語氣は、少なくとも八つの語氣が想定され、強勢の有無によつて二種類に分けられることが、先行研究、および中国語母語話者を対象にした伊藤(二〇二二)、伊藤(二〇二二)の調査で明らかになっている。本発表では、八つの語氣に共通する「可」の意味を、ドイツ語の副詞「doch」の意味論を参考に、以下のように提案した。「話し手がある命題pを「可」を伴つて発話するときには、当該文脈に命題pの代わりになるような命題q(例えば、同じ質問の答えの候補として挙げられるような命題)が存在し、かつ、命題pは命題q

とは両立しないという状況下にある。そして、この状況が満たされれば、話し手は命題pを真であると断言し、暗に命題qを偽であると示唆する。」さらに、具体的な例に即して命題qがどのように得られるかを示した。

〈大会発表要旨〉

◆魏晨 現代中国における「シスターフッド」の形成——「女子書店」の活動を手がかりに シスターフッドはフェミニズム理論の重要な概念の一つであり、女性同士の連帯を強調するものである。シスターフッドは感情的な絆であると同時に、この感情的な基盤に基づいて女性が組織的な政治活動や社会活動に従事する動機ともなる。この概念自体は一九六〇年代から一九七〇年代にかけて導入され、広く受け入れられたが、そのシスターフッドの精神は近代中国の女性運動においても非常に重要な役割を果たしている。本報告では、一九三〇年代に黄心勉夫妻によつて設立・運営された「女子書店」に焦点を当て、女子書店が女性による女性のための一連の出版・教

育・援助活動について考察する。それらの活動の考察を通して、新文化運動思潮や愛国救亡思想の下で女性の連帯がどのように誕生し、どのような特徴を示しているかを明らかにする。さらに、それが現代中国女性の日常生活と精神世界にどのような影響を与えたのかについても考えてみる。

◆王小环 隐藏与表现…废名小说的文体价值 废名小说突破了中国传统小说单一的情节模式和叙事结构，通过选取意象、营造意境突破以情节为中心对小说艺术的建构，呈现出中国现代小说的艺术自觉。在历史的际遇中，佛教文化使废名小说实现了叙事时间的转型，顿悟、悲悯等心理活动和情感活动也使隐藏的叙事主体有了表现的衔接点。

在中西文化资源的对比与筛选中，废名在小说中进行了新的表达方式的多种尝试。短篇小说《菱荡》中散文化自由的句式将古典诗歌的意境营造引入小说文体结构之中。废名小说通过诗化散文的语言，营造宁静的意境，使社会环境的宁静与人物心灵的宁静相统一。

叙事视角的转变、小说语言的散文化和诗化倾向，又进一步丰富小说文本的文体价值。废名的小说创作一直处于探索当中，即使像《莫须有先生传》《莫须有先生坐飞机以后》有些晦涩的内容，也体现了废名在汉语写作中的尝试，小说文体价值在于它的无限丰富性。

◆閻瑜 中島敦の近代中国への関心における家族の影響 中島敦は中国古典に限らず、近代中国にも強い興味を抱き、その背景には楽しい中国旅行や谷崎潤一郎への関心が挙げられるが、特に伯父や叔父たちの影響が顕著であると言える。本発表は、中島敦の日記・書簡・蔵書・創作断片などの資料を通じ、彼が家族から近代中国に対する関心をどのように受け継いでいたかを探求したものである。

考察の結果、中島敦の伯父・端、伯父・疎、および叔父・比多吉は、長期間にわたって中国に滞在し、中国社会の状況に深い理解を持ち、文人学者や政府要人と交友関係を築いていた。比多吉の長女である莊島斐子も同様に中国で十数年過ごし、中国の現状について詳細な知識を

持っていたであろう。中島敦は、親しい関係にあった伯父、叔父、そして莊島斐子から、中国社会や文学界に関する情報を得る機会が豊富にあったと考えられる。さらに、中島敦は谷崎潤一郎の「上海遊記」を通じて中国文壇に関する最新の状態を把握し、郭沫若などの中国の新進作家の名前を覚えてと推測される。これらの情報が、中島敦に中国社会の現状を詳細に理解させ、彼の作品「北方行」の創作に影響を及ぼし、作品の内容な幅を広げたと考えられる。

◆泰田利栄子 『急就篇』と『千字文』とのつながりについて―北魏における受容と継承、南朝梁における刷新― 本発表では、まず『史籀篇』から『千字文』に至る主な小学書の系譜を確認したのち、完全な形で現存する『急就篇』と『千字文』との比較・考察を試みた。両書を比較する先行研究はすでに見られるが、本研究では、特に南朝と北朝における二書の伝播状況とその理由、そして『急就篇』に比べ『千字文』が儒教的性格を有する理由について論じた。異民族の北魏

は、漢代の『急就篇』を受容し継承するにとどまっていたが、漢民族の南朝梁は、それを刷新して、最新の小学書である『千字文』を生み出した。しかし同書は八王のために撰述された教養の精髓であった、敵対する北魏に伝播する状況にはなかつたことを指摘した。

形式と内容については、両書間の継承関係が確認でき、『千字文』に儒教的性格が強く表れる理由は、『千字文』が武帝の儒学振興政策を反映したためだと結論づけた。

〈博士論文要旨〉

◆泰田利栄子 周興嗣および『千字文』に関する研究 本論文は、『千字文』韻文の作者として知られながらも不明点の多い人物である周興嗣、および『千字文』に関する研究である。

第一部では、人物像を掘り下げること、これまで未詳であった『千字文』の成立年代や、呉均との関係、また、「一夜白髪」説などの逸話の淵源が明らかとなった。

第二部では、人物研究の結果を踏まえ

『千字文』成立に関する諸問題の整理を試みた。梁代に入り、建国事業に取り組む武帝が『急就篇』にかわる新たな小学書編纂を意図し、所蔵する「王羲之書を用いて韻文を作らせたことや、『千字文』と王充『論衡』自紀篇の「日諷千字」という言葉との関連性などについて指摘した。啓功氏の視点を発展させ、「韻文と書」という二つの要素を切り分けて考察することで、梁代の各種『千字文』成立について体系化することができた。また、六世紀半ば前後等とされてきた『千字文』の日本への伝来時期について、百

済が五一二年に『千字文』を入手し、その後、最短では五一三年に、五経博士が『論語』とともに『千字文』を持参した可能性がある、という結論に至った。

〈修士論文要旨〉

◆水野志和 日本における中華B.L受容 近年の日本で、中華B.Lが人気になっている。金字塔は墨香銅臭『魔道祖師』だが、日本語翻訳版小説が発売される前から、日本でもファンが確認できる。中国語原文を機械翻訳する「魔翻訳」は

本文の読解を必ずしも助けなかったが、ファン同士の解釈を共有したり作品情報を共有するなどのファンコミュニティ形成のきっかけになった。

次に『魔道祖師』の二次創作から作品の構造を分析したところ、時系列やキャラクターの特徴などから、読者たちが再解釈する余白が多いことがわかった。また作品の仙侠の世界観から逸脱するパロディは少ないこと、仙侠の世界観であればあり得そうな一定のパロディと公式グッズから派生したパロディは受け入れられることがわかった。

改めて日本の王道B.Lと比較すると、大きな違いはない。仙侠の世界観を挙げることができるが、この世界観も、ホモソーシャルが描かれた任侠ものとよく似ている。つまり、『魔道祖師』は日本人読者にとってわかりやすく、だから「魔翻訳」の困難があっても読者を獲得できたのだと考えられる。

◆謝婧 張九齡離別詩について—官職変遷に着目して 本論文は、張九齡の官職変遷に着目し、彼の離別詩に現れる個人

的な感情の社会的儀礼への変化およびその起因を探究する。

張九齡の年譜研究を整理し、人物小伝を作成した。官職の段階に応じて五つの段階に分け、各段階での離別詩を精読することで、任職地や官位の違いが離別詩にあたえる影響が明らかになった。

第一段階では、低い官職と昇進のないことにより、離別詩の創作に大きな自由度が与えられ、詩には個人的で真摯な感情が溢れ、公的な表現は殆ど見られない。第二段階では、官職の昇進に伴い、離別詩の一般的で公式的な典型への傾斜が顕著になる。第三段階では、任職場所の変更により、離別詩に対する関心が再び離別そのものへと戻る。第四段階の公的な離別詩は、典故の列挙が少なく、離別という事件への関心と注目があることが特徴であり、前三段階の制作手法が融合されたものと考えられる。第五段階では、公的な叙景と私的な抒情を兼備している。